

# 『国際関係論の基礎』の Web 活用による展開とそのインパクト」

清水 亮

松阪大学政策学部

## 1. はじめに：『国際関係論の基礎』という「Project X」

平成16年度の松阪大学学生生活実態調査によると、学生が授業の予習・復習に費やす時間は、1週間に1時間未満が全体の77%、1時間から2時間未満が11%とほぼ9割の学生時間が2時間未満となっている。それに対し、4時間以上という学生は7%にすぎない。ほぼ9割の学生の1日平均の授業以外の学習時間は10分未満という結果が出ている。そのような学生たちに、『政治学の基礎』や『経済学の基礎』のような準必修の導入科目でさえ、科目に関心を持たせ受講させることには大変な困難が伴うことはもちろんで、いわんや選択科目の1つにすぎない『国際関係論の基礎』をやである。さらに、学生の関心は専ら地元・県内に向けられ、国家レベルの問題や世界の問題への関心は、BSE問題などごく身近なもの以外は、ほぼ皆無とあってよい。

アメリカの高等教育におけるアクティブラーニングの実践では、学生の学習能力への期待を常に高く維持すること、24時間体制で学生に気を配ること、教員は自分の専門分野の科目の授業に熱意を持って全力を傾けることが強調されている。『国際関係論の基礎』の Web 活用の展開は、このような学生たちの関心をいかにしたら喚起でき、授業に積極的にかかわらせるかという課題への1つの試みとして始めたものである。目の前に立ちふさがる2つの試練に『国際関係論の基礎』の Web 活用を考案し、現在、授業の e-learning 化を目標にプロジェクトは進行中である。授業を Power Point をフルに活用して行い、今年度は、毎回のクイズと最終試験を全て Web 上で実施する段階まで至っている。授業の e-learning 化へのプロセスの中で、今年度とりわけ顕著に現れた興味深い現象について、授業の Web 活用とそのインパクトのフレームの中で考察してみたい。

## 2. 『国際関係論の基礎』という授業

選択の導入科目の1つとして『国際関係論の基礎』は、国際関係論担当の2人の教員が、前期と後期に分かれて、2単位の授業として2コマずつ担当する比較的多人数の講義である。高等学校教諭1種免許（公民）取得の必修科目の『国際関係論』の先修条件科目であり、教員免許取得を希望する学生には、必要である。講義の内容は、国際関係の考え方の修得を目標に、基本的な国際関係理論の紹介しながら現実の国際情勢の分析を試みるもので、全12回の授業である。担当当初の OHP を利用した授業と論述式の間・期末試験という形での授業は、ほぼ9割の学生の1日の学習時間が10分未満の状況では、試験の解答で判断する限り、成果は期待とは程遠いものであった。そこで、3年程前から、学生の理解の向上、関心の喚起の目指そうと、よりわかりやすい授業を目指し、授業を Power Point をフルに活用して進め、授業の最後に、マークシート方式のマルチプル・チョイスのクイズを実施、マークシート・リーダーで点数化し出席点を加算する方法を導入した。しかし、学生の授業評価では、OHP を活用した授業と同様、授業の進め方の点では、進行が早くノートが取りづらいなどのコメントが寄せられた。クイズの実施面については、毎

回授業の最後で行ったため、即答を求めることになる点、マークシート・リーダーの集計表を見ただけでは、出席していて0点だった学生と欠席者の区別がつかないなどの問題点も浮上した。これらの問題点の改善を目指し、平成16年度は、クイズを授業時間外の一定期間に、各自がWeb上で行うことにして、クイズに取られていた10分弱の授業時間を含めて90分をフルに使って、昨年度と同じボリュームの授業を行う形に変え、進行が早いというクレームに対応することを試みた。この試みは、やる気のある学生には、クイズ前に自ら授業を振り返る機会を与えること、同時に、授業には欠席したものの自ら勉強した学生にも機会を与えることを目指したものである。クイズは全10回、毎回6問の問題を出題し、学生は答えの4つの選択肢から正解を選ぶフォーマットで実施した。学生が自ら、授業後、週末までに <http://uso5001.matsusaka-u.ac.jp/ismHTML> にログインし、制限時間10分の間に解答するシステムを取った。学期末試験は、使用テキストから40問を出題し、クイズ同様のフォーマットで、学生を情報教育センターに集め同時に実施した。

### 3. 平成16年度の『国際関係論の基礎』のインパクト

今年度の『国際関係論の基礎』は、イニシャル・ドロップ、リテンション、アチーブメントの3点で興味深い結果を提供した。通常、受講生は、教学課の最終的な履修登録の上では、月曜日のクラスが63名、火曜日のクラスが96名の受講生がいたことになっている。履修登録の確定までには、学期開始から3週間ほどかかり、実際の授業スケジュールでは4週目以降となってしまうので、授業の初回のイントロダクションで、毎週のクイズ及び学期末試験受験には、<http://uso5001.matsusaka-u.ac.jp/ismHTML> へのログイン登録が、教学課での履修登録以外に、別に必要であることを説明し、サイトへのアクセス登録を行った。その結果、ログイン登録を行った学生は、月曜日のクラスでは44名、火曜日のクラスでは66名にすぎなかった。デジタル・ディバイドによるものと考えられるイニシャル・ドロップにより、受講生数が履修登録者数の69.8%（月曜日のクラス）、68.7%（火曜日のクラス）のスタートとなった。このイニシャル・ドロップは従来では考えられないものであった。そして毎回の6問のクイズの配点を各1点と計算し、10回のクイズで最大60点の出席点の配点することとした。10回のクイズの総合計点が、結果として10点以下の学生をドロップアウトとみなすと、アクティブな受講生は、41名（月曜日）、57名（火曜日）となった。そのうち、単位修得者は、33名（月曜日）、43名（火曜日）であった。単位認定率は、アクティブな受講生に対し、80.1%（月曜日）、75.1%（火曜日）となった。ログイン登録を行った学生全体について見ても、75%（月曜日）、65.1%（火曜日）の単位認定率であった。3割強のイニシャル・ドロップがあったものの、その後のリテンションと単位認定のアチーブメントは、『国際関係論の基礎』を担当して以来、最高のパーセンテージとなった。

### 4. おわりに：結果と今後の課題

平成16年度の『国際関係論の基礎』の完全Web化へのファースト・ステップは、リテンション、アチーブメントの点でアクティブラーニングの実践を支持する結果をもらった。来年度は、デジタル・ディバイドのイニシャル・ドロップの改善に努めながら、Web化のセカンド・ステップとして、FujitsuのAuthoring Partner Xpertを導入し、実際の授業を録画したものと授業のPower PointをWeb上に新たに載せることによって、授業のe-learning化を進めながら、そのインパクトと成果を分析したいと考えている。